

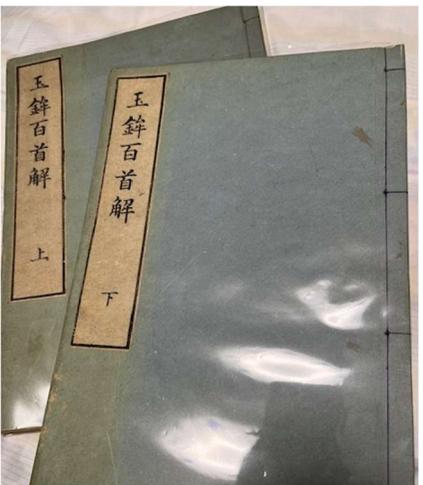
## 古書のたのしみ（令和七年二月）

土屋博

一「玉銚百首解 上下」本居宣長先生詠、門人稻掛大平註

（京都書林風月堂鴻寶堂、明治十七年刊、上冊六丁、下冊五丁）

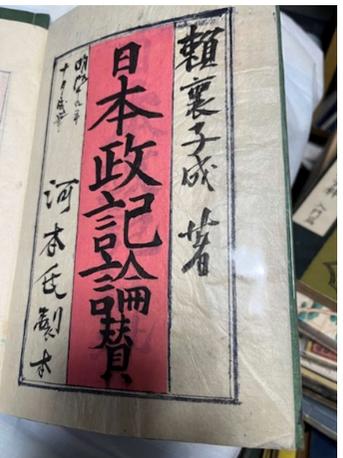
古書價格千園也。「玉銚百首」（天明七年、一七八七年刊）は我が國成立の道を百首の和歌にてあらはしたるものなり。第一首は、「撞賢木（つきさかき）巖之御魂（いつのみたま）とあめつちにいりてり通らす日の大御神」。また、「眞具（まつぶさ）にいかで知らまし古（いしへ）を日本書紀（やまとみふみ）の世になかりせば」など。



二「日本政記論贊 卷上、卷下」頼襄子成著、岡山縣平民河本正和筆

（河本正和製本、明治十九年筆、卷上七九丁、卷下六四丁）

古書價格五百園也。無名の一般人、岡山縣平民河本正和氏による筆寫和綴本なり。昔人の勉強振り、並々ならぬ努力の成果物を目の当たりにすることを得。身の引き締まる思ひぞする。



三「校註 土佐日記 全」永澤雅彦先生校註

(薰志堂藏、明治廿五年刊、七六頁)

古書價格五百圓也。斷り書に曰く、「本書は今を去る事一千有餘年前、紀貫之卿の舊作にして國語文中尤も優雅典麗なる所謂其の雅を出て其の粹を抜けるものぞかし。さる者から卿の卒後三百餘年を経て、歌道の宗匠、棟梁なる藤原の定家卿手自臨寫し給ふと有るを見ても、世の絶作、後の模範ともたふとめるは言はでもしるべき事なり」と。

四「詳註細評 現代名家文選 全」文學士久保天隨編述

(金刺芳流堂、明治四十一年刊、正價金壹圓四拾錢、五四四頁)

古書價格五百圓也。二度目の購入。大町桂月については、「謂ゆる赤門文學者と稱するもの、その多きや十指屈し盡してなほ違算あるを覺ゆる程なり。而して文名最も高く且つ之を以て活を爲すの久しき、桂月に過ぐるものあらず。景星祥鳳固より擬すべからずと雖も、亦た以て昭代文壇の一雄鎮となすべし」と。

五「源氏物語評釋 全」萩原廣道著

(櫻園書院藏版、大正十五年三版、七七五頁)

古書價格二千圓也。二度目の購入。函入。萩原廣道は、一八一五年生れ、一八六四年歿の歌人、國學者。古註釋の最高峰と稱せらる。釋のみならず評を重んずるところに特色あり。

六「上代日本文學史」武田祐吉著

(博文館、昭和六年再版、正價金貳圓五拾錢、三八二頁)

古書價格千圓也。函入。初版は昭和五年。或る調査によらば、萬葉集には一人稱代名詞「われ」の語が目立つて多く、四割近き由。一方、古今集は二十五パーセント程度、また、新古今集に到りては十五パーセント程度。

七「父祖の足跡」平泉澄著

八「續父祖の足跡」平泉澄著

九「續々父祖の足跡」平泉澄著

(時事通信社、正篇昭和三十八年刊、續篇昭和三十九年刊、續々篇昭和四十年刊、定價四百

五拾圓、五百園、五百園。正篇三六四頁、續篇三二六頁、續々篇二八八頁)

古書價格各五百園也。はしがきに曰く、「おのれの低劣の爲に他の高雅を誤解してはならず、後世を文化と思ひあがつて往事を幼稚とあなどつてはならぬ。」「たまたま週刊時事より求められ、讀者より勵まされて、一年刊隔週『父祖の足跡』を連載し、ここにそれをまとめて一冊として刊行する運びとなつた。」と。平泉澄(きよし)は、一八九五年生れ、一九八四年歿。昭和十年より二十年八月まで東大教授、以後公職追放となる。正篇は、「美しき天然」より「橘曙覧」まで。續篇は「更科日記」より「平家の滅亡」まで。續々篇は「影は形に添ひ」より「一門の棟梁」まで。

十「頼山陽とその時代」中村眞一郎著

(中央公論社、昭和四十六年刊、定價三千八百圓、本文六四四頁)

古書價格千圓也。函入。既に文庫本も所有しつれど、名著なれば、座右に本書を置きたし。前書によらば、中村眞一郎(一九一八年生れ、一九九七年歿。開成中學、一高、東大佛文科卒。一九五七年に元文學座女優の妻は睡眠薬自殺を遂ぐ。)のはかなりひどき神経障害を患ひ、それを脱するために専ら事實のみを印す木崎好尚編「頼山陽全傳」を三ヶ月掛けて毎日読み、山陽の生れたる日より死に到るまでを辿り、山陽も若き日に神経障害を患ひたることに共感したる由。

3

十一「考證 伊勢物語詳解」鎌田正憲著

(國書刊行會、一九七四年刊、定價七千圓、五一二頁)

古書價格五百圓也。大正八年刊原著の復刻版なり。緒言に曰く、「この物語のごとく註釋批評の書多きに至りては、まづ舊説の大體に通ずる要あるべし。乃ち諸書を討究して舊説の樞要を掲げたり」と。二段組み印刷の稀に見る詳しさの参考書なるに、僅か五百圓なれば、古書蒐集の楽しみ、正にここにあり。

十二「少女少女古典文學館 伊勢物語」俵萬智著

(講談社、一九九一年、刊行記念特別定價千五百圓、三〇二頁)

古書價格二百圓也。伊勢物語百二十五段のうち主要なる五十四段を歌人俵萬智(一九六二年生れ、早稲田大學文學部卒)、口語譯す。最も分り易き伊勢物語入門書として広く奨めたし。原文和歌は平易なる現代語短歌に作り直され、たとへば、二十一「出でて去なば心軽しと

いひやせん世のありさまを人は知らねば」は、「人はみな軽い女というだろうふたりのことはわからないから」といふ調子なり。神奈川県立橋本高校の國語教員を四年間勤めたる実績、遺憾無く發揮せられたり。(なほ、本書は北杜夫譯「竹取物語」も併録す。)

十三「戀する伊勢物語」 俵萬智著

(ちくま文庫、一九九五年刊、定價本體五百四十圓、二七〇頁)

古書價格三百圓也。一九九一年に讀賣新聞日曜版に連載されたるものなれば、分り易し。單行本は一九九二年に刊行せらる。

十四「本居宣長の學問と思想」 芳賀登著

(雄山閣出版、平成十三年刊、定價本體八千八百圓、三六六頁)

古書價格二千五百圓也。芳賀登(一九二六年生れ、二〇一二年歿)は、東京文理科大學史學科卒、筑波大學教授。

十五「超譯マンガ 百人一首物語 全首収録版」

(學研、二〇一七年刊、定價本體千八百圓、六七七頁)

古書價格千參百圓也。厚さ、オールカラー。

十六「紀貫之の土佐日記は航海記」 西野恕著

(リーブル出版、二〇二〇年刊、定價本體二千圓、一八九頁)

古書價格千圓也。著者の西野恕(ゆるす)は、昭和十一年生れ、大阪市立大卒の税理士。ヨット部所屬、國體出場経験も有するヨットマンなり。本書の帯には、日本文學の原典土佐日記の新しき讀み方、手こぎ舟で向かふ土佐、京都五十五日間の船旅物語とあり。「ちはやふる神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つけるかな」の歌には、貫之の大事にしていた鏡を海に投げ入れ、海神のにやつと笑ふ様子活写せらる。

(令和七年三月十三日受附)